

平成 21 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18330031

研究課題名（和文） エスニック紛争のグローバル化：南アジア系移民の役割

研究課題名（英文） The Globalization of Ethnic Conflicts: The Role of South Asian Diaspora

研究代表者

広瀬 崇子（HIROSE TAKAKO）

専修大学・法学部・教授

研究者番号：20119431

研究成果の概要：

3つのコミュニティの政治活動の分析に焦点を絞ったが、タミル人に関しては、紛争が進行中で、政治の主流での代表が不在との理由から、現地調査が予定通りに運ばなかった。明らかになった点は、①ディアスポラ・コミュニティ内部は複雑かつ分裂しており、B. アンダーソンの「遠隔地ナショナリズム」概念でくくることはできない、②コミュニティは、貧富の差、社会的成功度の相違により分断されている、③移民前の社会的地位、カースト状況などが、ホームランドの紛争への関与の度合い、方法などの変数となる場合が多い、などである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2007年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2008年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
年度			
総計	10,800,000	3,240,000	14,040,000

研究分野：南アジアの政治・外交

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：南アジア、ディアスポラ、エスニック紛争、移民政策、マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者および分担者は、1980年代から南アジアの国民国家の変容に関する研究を行ってきた。具体的には、連邦制の問題、国家連合、地域協力、国家を跨るエスニック紛争の研究などである。その研究を、グローバル化が進む世界におけるディアスポラの研究へと発展させたのが、本研究である。

1980年代以降、エスニック問題に関する研究は、日本のみならず欧米やアジア諸国でも

活発に行われるようになってきた。その際、エスニック紛争は国民国家への挑戦として捉えられることが多く、中央政府と特定の地域に基盤を置くエスニック・グループの関係や、また紛争の解決策の一つとして連邦制などが論じられることが多かった。いずれも国民国家の領域を前提としている。領域的アプローチと呼んでもよい。既存の研究が扱う国境を越える動きとしては、隣国の同胞エスニック・グループとの関係や、敵対する隣国からの反政府勢力への支援までで終わってい

るのがほぼ実情であった。

しかし、われわれ研究グループは、情報技術の進化とグローバル化の進行によって、エスニック・グループのもつネットワークの重要性は近年一段と増してきている状況下で、遠隔地ナショナリズムも一層強まり、本国のエスニック紛争に積極的に関与するケースが多い点に着目した。たとえば、パンジャブ紛争時に、カナダのトロント発のインド航空機が爆破された事件には、カナダに住むシク教徒が関与していたといわれ、イギリスに住むカシミール人グループは過激な主張で知られる。また北米に住むタミル人はスリランカのタミル人組織「タミル・イーラム解放の虎（LTTE）」に毎月6ドルの送金を義務付けられたとの報告があるなどの例によって示された。

こうした在外のコミュニティの遠隔地ナショナリズムは、B. アンダーソンが指摘するように、しばしば本国に住む人間のそれより強硬、かつ過激であるとされていた。しかし、果たしてそのコミュニティの歴史、在住の社会とのかかわり方の異なるコミュニティが、本国との絆や、紛争に対する態度が同じような傾向を示すのであろうかとの疑問が生じた。そこで、本研究では、従来の領土的アプローチに加えて、国境を越え世界に広がるエスニック・グループのネットワークの存在と本国におけるエスニック紛争の関係に正面から取り組み、現地調査などに基づいて、必ずしも一律でない行動様式を詳細に分析したいと考え、本研究計画を企画した。

2. 研究の目的

本研究は、南アジアの3大エスニック紛争—タミル紛争、パンジャブ紛争、カシミール紛争—のエスカレーションおよび和平プロセスにおける、海外、特にイギリス、アメリカ、カナダに居住するエスニック・コミュニティ（ディアスポラ）の役割を比較分析し、国境を越えるエスニック・コミュニティのネットワークと国民国家の関係を明らかにすることを目的とした。

本研究が最終的に目指したものは、第1に、エスニック紛争研究に新たな視点を提供するということであった。前述のごとく、南アジアのエスニック紛争に関する既存の研究は、インド、欧米および日本でも多数出されているが、それらは主に国民国家の枠内と国家間関係という二つの次元で扱われてきた。ディアスポラの関与としては、資金の流れ、イデオロギーの強化という側面に関して断

片的に言及はされてきたが、体系的な研究はなされていない。本研究は3つの事例研究を基礎として、エスニック紛争のプロセスを再考しようという目的を掲げた。

第2に、データ収集である。研究遂行にあたっては、エスニック・コミュニティの組織の調査を通して統計的な数字を把握するほか、それぞれのエスニック・コミュニティが集中的に定住している地点を中心に個別インタビューを行うことによってオリジナル資料を取得することを計画した。さらに、この調査によって取得した資料は、できる限りデジタル化して、研究完成時にはホームページなどを通じて公開することを計画した。3年の研究が終わった現在もその計画は変わっていない。それらのデータベースは次世代の研究者にとっては貴重な財産となるはずであり、またさらに新たな資料を追加することによって、体系的なデータ蓄積が可能となると考えた。

本研究を通じて具体的に明らかにしたい点は以下の通りであった。

- (1) 在外のカシミール人（パキスタン側のアーザード・カシミール州出身のムスリム（主にイギリスのブラッドフォード在住）、主にスリランカ出身のタミル人（北米、特にカナダのオンタリオ州在住）、インドのパンジャブ州出身のシク教徒（ロンドンおよび北米、特にカナダのブリティッシュ・コロンビアおよびトロント在住）の3つのコミュニティの実態把握。
 - ① それぞれのエスニック・コミュニティの移民と定住の歴史的経緯
 - ② 移住先での社会的地位などの実態把握（人口、世帯数、教育水準、職業、所得など）
 - ③ 海外のエスニック・コミュニティの組織と機能
 - ④ 経済のグローバル化とディアスポラの動向
- (2) 本国（インド、パキスタン、スリランカ）と海外在住のエスニック・グループの関係
 - ① 本国のエスニック・グループと在外居住のエスニック・コミュニティのネットワーク
 - ② 本国政府の在外居住者に対する政策
- (3) エスニック紛争と在外エスニック・グループの関係
 - ① 紛争の経緯と和平プロセス
 - ② エスニック紛争のエスカレーションにおける在外コミュニティの役割
 - ③ エスニック紛争の和平プロセスにおける在外コミュニティの役割、特に9.11事件以後の反テロの戦いがエスニック紛争に

3. 研究の方法

研究の方法は、第1に、先行研究を十分にフォローし、それらの中から参考になる仮説を引き出し、研究の方向づけの参考とした。また、それらの研究を行ってきた研究者と直接会って、意見交換を行い、最新の知見を得るとともに、われわれの研究の相対化を行うことを心がけた。

第2に、資料収集と整理である。南アジア系移民の歴史についてはかなりの数の先行研究があったため、それらを十分に活用することとした。また、ディアスポラのホスト国での経済的・社会的地位や活動についてはすでにかかなりの資料が公開されていた。インド政府が2001年に公表したインド人ディアスポラに関する報告書はその一つである。さらに、カナダやイギリスの場合には、センサス・データやコミュニティごとの経済指標などがウェブ上でかなりの程度公開されていたので、それらの資料を利用し、加えて現地調査で地方自治体などから統計資料を収集した。

第3の重要な点として現地調査が挙げられる。本研究の特徴のひとつは、自ら行う現地調査によってオリジナル資料を収集することであった。在外のディアスポラの組織、それもエスニック・コミュニティ別の組織を現地調査でまず把握し、それらの関係者への聞き取り調査を行うことが研究の重要な要素であった。(1)の③、④および(2)、(3)に関して、現地調査でパンフレットやその他の発行物を入手し、聞き取り調査を行った。こうして入手した資料を基に、在外エスニック・コミュニティの実態と活動を把握することを計画した。

4. 研究成果

本研究は、最終的に3つのコミュニティの**政治活動**の分析に焦点を絞った。しかしタミル人に関しては、紛争が現在進行形であること、政治の主流での代表が不在であることなどから、現地調査が当初予定していたようには運ばなかった。カシミールとパンジャープのシク教徒については、現地調査も概ね計画通りに進み、加えて出身地であるパキスタン側のカシミールおよびインドのパンジャープ州において現地調査を行った。年5回程度の研究会および学会発表の際の討論などを通じて明らかになった点は以下の通りであ

る。

- (1) ホスト国におけるそれぞれのコミュニティ内部は、非常に複雑かつ分裂しており、ベネディクト・アンダーソンの「遠隔地ナショナリズム」概念でくくれるほど単純ではない。
- (2) コミュニティの分裂にはいくつかの軸がある。第1は貧富の差、ホスト国での成功度の違いなどによる両極化で、特にカナダのシク教徒にその傾向が強い。
- (3) 第2の分裂は本国の紛争そのものとの立場の相違からくるものである。カシミールは、パキスタンにおける政治的地位と同時にインド側のカシミールの扱いをめぐる利害が対立し、それが在外組織の分裂につながっている。
- (4) 第3に、移民前の社会的地位、カーストなどの状況が、ホームランドの紛争への関与の度合いの変数となる場合が多い。特にシク教徒の場合にそれが顕著である。
- (5) 一方、ホスト国の移民政策、マイノリティ政策もディアスポラの行動に大きな影響を及ぼしている。イギリス政府の放任主義は移民コミュニティのゲッター化現象を生み、中でもムスリムの社会的地位の低さはテロのリクルートのターゲットとなる可能性がある。
- (6) カナダの多文化主義は、インド出身の「カナダ人」を生むことになった。彼らはホスト国の政治の主流にすでに自らの地位を確保している。本国の紛争にも、「カナダ人」として対処し、その結果過激な分子から命を狙われる事態すら起こった。それでも、過激な「遠隔地ナショナリズム」に対して協力に批判し続けている政治家がカナダには相当数いる。彼らの行動は過激派の暴力行為の影であり注目されてこなかったが、ディアスポラの行動様式としては極めて重要な要素である。

今後の課題

本研究は最終的にディアスポラの政治活動に焦点を絞った。その結果、調査の対象としては、国会議員や州議会議員など、政治の主流で活躍している人間が多かった。

しかし、ホスト国での様々な政治活動がホームランドのエスニック紛争にどれほどの影響を及ぼしてきたのかを明らかにすることはできなかった。くわえてより重要なのは、たとえばカシミール・ムスリムの分離運動を支援するような動きは、議会政治においてというよりも、議会外の、アンダーグラウンド

な舞台で展開される傾向があると推測される点である。したがって、たとえば、英国／カナダにおける、シクのグルドワラや、ムスリムのモスク、宗教学校、それぞれのコミュニティ内の外部者には不可視な部分に、その存在が噂されてきたような、資金集め、過激派教育、活動家リクルートのネットワークの解明が欠かせないことは論を待たない。

なかんずく、宗教の果たす役割に注意を払う必要がある。パンジャブ紛争、カシミール紛争のいずれも、インド中央政府と対峙してきたエスニック集団は、強い宗教的アイデンティティを有してきた。インド、ならびに亜大陸全体では、多数派のヒンドゥーに対し、シク、ムスリムは少数派ではあるが、それぞれの地域（パンジャブ、カシミール）では多数派の地位を占めてきた。かれらは、欧米社会に移り住んでからも、それぞれの宗教を大事にし、宗教施設に日常的に通っている。そしてその場で同郷の絆を確認し合い、長く集団としてのアイデンティティを維持しているように思われる。そうであるならば、議会内であれ、議会外であれ、エリートがおよそ政治的動員を図ろうとするときには、宗教の力を無視することはできないはずである。

それゆえ、ホスト国における政治活動の際、宗教がいかなる役割を果たしているのかの解明が喫緊の課題となろう。具体的には、宗教施設がどのような経緯でつくられたか、そしてその宗教施設を基盤としたコミュニティ活動がどのように展開されているか、集会・デモといった示威運動の組織がなされているか、募金活動の状況はどうなっているか、などを明らかにする必要がある。

さらに、パンジャブ・シクやカシミール・ムスリムが、ホームランドにおける対抗集団としてのヒンドゥーと、ホスト国においてどのような関係にあるかを解明することも重要である。そのためには、欧米社会におけるヒンドゥー・コミュニティの調査が、シクやムスリムと同様に求められよう。すなわち、ヒンドゥーがどのような経緯で、いつ、どの国・地域に、どの程度の規模で移住したのか。パンジャブ・シクやカシミール・ムスリムと比べてどのような生活・経済状態にあり、どのような政治活動を展開しているのか。またそうした政治活動は、シクやムスリムのそれと競合関係にあるのか否かを明らかにし、そのうえで在外ヒンドゥーの政治活動が、エスニック紛争に与えた影響を考察することが重要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 広瀬崇子、「インド同時多発テロの深層」、『中央公論』、査読無、2009年2月号、2009年、124-131頁
- ② 伊藤融、「インドの核政策の現状と展望：『核兵器国』容認の国際潮流形成過程」、『国際問題』、査読無、第570号、2008年、67-76頁
- ③ 南埜猛、「インド系移民の原状と動向：インド政府発表資料（1980年報告と2001年報告）をもとに」、『移民研究』、査読有、第4号、2008年、31-50頁
- ④ 広瀬崇子、「序—南アジアの国際関係」、『国際安全保障』、査読有、第35巻第2号、2007年、1-10頁
- ⑤ 広瀬崇子、「米印原子力協定の政治的意味」、『原子力eye』、査読無、Vol. 53, No. 11、2007年、28-31頁
- ⑥ 広瀬崇子、「台頭するインドの全方位外交」、『改革者』、査読無、2007年5月号、2007年、32-35頁
- ⑦ 広瀬崇子、「安定感を高めるインドの国内政治と外交戦略」、財務省報告書『インド経済の諸課題と対印経済協力のあり方』、査読無、2007年、3-12頁
- ⑧ Tsukasa Mizushima, *Global Economy and Indigenous Development: Port Towns in Pre-colonial South India, Creating Global History from Asian Perspectives: Proceedings of Global History Seminars and Workshops*, 査読無 2007, 63-88頁
- ⑨ 伊藤融、「『カシミール』をめぐるアイデンティティと安全保障観の変容」、『国際安全保障』、査読有、第35巻第2号、2007年、77-95頁
- ⑩ 伊藤融、「核兵器保有の論理とその内外への影響」、『アジア研究』、査読有、第53号、2007年、43-56頁
- ⑪ 水島司、「歴史空間学の展望」、『史学雑誌』、査読有、第116編第1号、2006年、36-38頁
- ⑫ 水島司、「インド近世をどう理解するか」、『歴史学研究』、査読有、第821号、2006年、49-59頁、74頁

[学会発表] (計 5 件)

- ① 広瀬崇子、「海外在住シク教徒の政治動向」、日本南アジア学会第21回全国大会テーマ別セッションⅢ、2008年9月28日、東洋大学
- ② 伊藤融、「英国におけるカシミール・ムスリムの政治動向」、日本南アジア学会第21回全国大会テーマ別セッションⅢ、2008年

9月28日、東洋大学

- ③北川将之、「イギリスとカナダの移民・マイノリティ政策」、日本南アジア学会第21回全国大会テーマ別セッションⅢ、2008年9月28日、東洋大学
- ④Takako Hirose, “Japanese Emerging Nationalism and its New Asia Policy”, Asian Security Dynamic, Nov 22-23 2007, New Delhi
- ⑤広瀬崇子、「核保有と国際政治」、日本国際政治学会、2007年10月27日、福岡国際会議場

[図書] (計5件)

- ①小槻文洋、帝国書院、『新詳 資料 地理の研究』、2009年、総344頁(205-215頁及び238-241頁)
- ②Takako Hirose, Promila & Co. Publishers, *Asian Security Dynamic: US, Japan and the Rising Powers*, 2008, pp. 188 (pp. 59-85)
- ③南埜猛、『エスニックワールドー世界と日本のエスニック社会ー』、2008年、総264頁(70-77頁)
- ④広瀬崇子、近藤正規、井上恭子、南埜猛著、『現代インドを知るための60章』、2007年、総344頁(21-26頁、32-35頁、38-42頁、273-277頁、314-318頁、325-330頁、331-336頁)
- ⑤水島司、山川出版社、『南アジア史3 南インド』、2007年、総463頁(229-259頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

広瀬 崇子 (HIROSE TAKAKO)
専修大学・法学部・教授
研究者番号：20119431

(2) 研究分担者

水島 司 (MIZUSHIMA TSUKASA)
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：70126283
南埜 猛 (MINAMINO TAKESHI)
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：20273815
伊藤 融 (ITO TORU)
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：50403465
小槻 文洋 (OTSUKI FUMIHIRO)
神戸夙川学院大学・観光文化学部・准教授
研究者番号：70454783
北川 将之 (KITAGAWA MASAYUKI)
神戸女学院大学・文学部・講師
研究者番号：00365694